

養成学校へ入ったときも、いわゆる東京の文壇から身を引き離して田舎に引いた理由。その後の文筆活動と作品世界の構築の仕方。それらに興味を持つのは、小説という形で人間真い文學のジャンルの読者としては当然のことだろう。小説家も、そうした読者の好奇心のツボをあえてはずさず、いわば「自伝」作品としてのサービスをないがしろにはしていない（ただし、

今月の推薦

対談・村上龍+小熊英二「『日本』からのエクソダス」(文學界)

村上龍の『希望の国のエクソダス』(文藝春秋)、小熊英二の『インド日記』(新曜社)を読んで面白く思ったので、この二冊の本の著者の対談を読んだのだが、案に違わず興味深かった。小熊氏が村上氏の「(日本が)崩れ始める」という言い方に異を唱え、「現在起きていることは、けっしてないものが崩れて、『だめ』になってしまったのではなくて、変化しているだけだとと思うんですね」と本文中共通するものであると思う。

これまでの共同体や制度を守ろうとする人たちには、それは「崩れ」「壊れ」かけているように見える。しかし、それを「最高じゃん」と思う若い人たちもいる。

「××崩壊」という表題の本はあまり信用できないのである(筆者一川村にも『満洲崩壊』という著書があるのだが……)。

南木 真の生者の道を歩んだのであり

とは対照的な内面小説、心境小説であると言えた

は、こうした丸山健二の非内向型であると言えた

とは対照的な内面小説、心境小説であると言えた

は、こうした丸山健二の非内向型であると言えた

アジアで初出品の西雅秋氏

リーガ国際彫刻展で大賞

北欧のバルト海に面したバルト三国(エストニア、ラトビア、リトアニア)で、旧ソ連の占領時代から40年余り続く彫刻展が「リーガ国際彫刻クリエイター」である。1958年に始まった同展は72年からは4年に一度、ラトビアの首都リーガで開催される。91年にバルト三国が旧ソ連からの独立して以後

を深め、現在ではロシアやドイツの作家も集うなどその名が示す通りの国際展へと成長した。

開催中の「リーガ国際彫刻クリエイター」

レ20000円



西 雅秋氏

ソ連の食器を並べ、天井からは旧ソ連のランプをつるし、テーブル上にはラトビア特産の酒や食品、さらに平和の象徴としての願い込めた燐の石膏像などを混在させたインスタレーション作品(一過性の芸術)である。

副賞は日本円で約6万円だ。平均年収が約2万円の国では安い金額ではないと西氏は言う。

「現代日本彫刻展」(山城大賞賞)は日本する一方、西氏は時折

リトアニア)で、旧ソ連の占領時代から40年余り続く彫刻展が「リーガ国際彫刻クリエイター」である。1958年に始まった同展は72年からは4年に一度、ラトビアの首都リーガで開催される。91年にバルト三国が旧ソ連からの独立して以後

を深め、現在ではロシアやドイツの作家も集うなどその名が示す通りの国際展へと成長した。

開催中の「リーガ国際彫刻クリエイター」

月6日まで)にアジアで初めてしてみれば、自分たちの今の姿

少ないので、どう使うかわからないが、今までかもしだれないが、今までの小說が川釣りでようやくを癒やしていくとした病を癒やされ、少し洗われれる」という言い方に、が反感を表す場面があるに「キレル」「壊れる」「開壊する」などこれはあまりに安易に使われる。人の心のことを言ひ

は、こうした丸山健二の非内向型であると言えた

は、こうした丸山健二の非内向型であると言えた